



KICK OFF 通信

目指せ！人財大国 アクティブ・ラーニングの実践

◆アクティブ・ラーニング

って何？

昨年3月の「学習指導要領」には、アクティブ・ラーニング(以下、ALと言います)の必要性を明確に致しました。ところで、このALですが、語訳をすると「主体的・対話的で深い学び」でして、何ともまあ固い表現です。要は、子ども達が「何を学ぶか」ではなくて、「どのように学ぶか」に力点を置いたスタイルを指します。

「主体的」とは、自分の意志と判断によって学習する姿を表わし、「対話的」とは、1人で学んだことを、教室内の他者とのコミュニケーションにより共有化を図ることを意味します。そして、これを繰り返しつつ、理解度を高め、より深く追求していくことに繋がっていきます。ですから、学んだ後には「振り返り」という時間も大切です。

◆アクティブ・ラーニングの効用

確かに、一方的な授業よりも、生徒自ら思考し、表現し、また調

査する時間があれば、それ相当な効果も期待できましょう。「友達同士の方が話せるし、質問しやすい」といった感想も聞かれます。

しかし、限られた授業時間内で、こうした手法を採用するにはそれ相当の工夫も必要です。それを主導するのは、やはり先生の指導力。その向上があってこそ、ALの効果も高まります。

先日、並木中等一貫校の中島校長先生を訪ねてきました。先生は全国行脚をしながら、ALの必要性につき、①50分授業では20分以内、②授業の感想を毎回80字以内で書かせる、③友達と経過を共有する等、独自で提唱されております。何よりAL導入で、授業が変わり、生徒や先生が変わり、皆が幸せになる、と強調されていたことは、非常に印象的でした。

◆その実践事例につき

例えば、「土砂災害から地域を守る」という課題を与えたとしましょう。子ども達は「自分の命を守

ること」を念頭に、調べたり、地域の方から話を聞いたり、疑似体験をしながら、「家族や地域の人の命を守る」ことについて、自らの考えを構築していきます。

また地域活性化に関して、その地域の魅力を見出し、キャンペーンを展開します。子ども達がガイド役として、観光客に積極的なPR活動をするといったようなことも、一種のALなのです。こうしたALは、教室の内外問わず、子ども達のポジティブな姿勢を生み出していくことでしょう。

◆これから目指す方向性

授業改革が叫ばれて久しい昨今を迎えました。これから20年後に、日本の教育を振り返った時、「あの頃が分岐点だった」と言われる時期が今なのかもしれません。

かつてからの一方向的な詰め込む教育指導は、思考力、発想力の停滞を招きます。何より子ども達の可能性を引き出すこと、ここに日本再生の鍵があるのです。



水戸まさし

【プロフィール】

昭和37年 7月28日生まれ
神奈川県立湘南高校・慶応義塾大学卒業後、サラリーマン生活を経て代議士秘書に・・・

平成 4年 「税は政治なり」との思いで始めた税理士試験に合格
平成 7年 県議会議員初当選～平成19年まで連続3期
平成19年 第21回 参議院議員選挙 当選
予算委員会・ODA委員会などの理事を歴任

平成26年 第47回 衆議院議員選挙 当選
維新の党・税制調査会事務局長
総務委員会&沖縄・北方領土特別委員会 両理事
国土交通委員会ならびに厚生労働委員会 委員
民進党・副幹事長 エネルギー調査会事務局次長

平成29年 第48回 衆議院選挙出馬せず下野する
平成30年 一般社団法人 人づくり・国創り研究会を設立

前衆議院議員 / 神奈川5区(戸塚・泉・瀬谷)